宮　前　区

宮前区のなりたち

宮前区は川崎市の中央部に位置し、東は高津区、北は多摩区、西は麻生区、南は横浜市都筑区に接する丘陵地帯の地域です。

この丘陵部からは、縄文中期から古墳時代にかけての多くの遺跡が発掘されています。奈良時代、律令制（りつりょうせい）のもとでは、武蔵国(むさしのくに)橘樹郡（たちばなぐん）に属していました。この郡役所は、野川の台地にある影向寺（ようごうじ）の東にあったようで、役所跡と推定される遺跡が発掘されています。この点から、古代にはこのあたりが川崎の中心地だったことがうかがえます。

平安時代初期の「延喜式」(えんぎしき)によると、武蔵国の勅旨牧（ちょくしまき＝朝廷の御用馬を生産する牧場）の一つである「石川の牧」が横浜市青葉区元石川を中心に広がり、これに連なる地域として有馬・馬絹・菅生などの馬関係の地名が使われたと考えられます。

鎌倉時代・室町時代には、野川郷・菅生郷・作延郷・太田渋子郷(おおたしぶこごう)などがありました。最近、太田渋子郷は、現在の上橋から長尾のあたりということもわかってきました。

江戸時代はじめには、これらの郷が区切られて、馬絹・上橋・有馬・野川・梶ヶ谷・下菅生・平・長尾の 8 村がつくられました。江戸時代中期になると、天真寺新田を加え 9 村となりました。

明治 8 年に下菅生と天真寺新田が合併して菅生村となりました。明治 22 年には、市制町村制がしかれ、江戸時代の村は統合されました。

馬絹・上橋・有馬・野川・梶ヶ谷の 5 村が「宮前村」（みやさきむら）に、菅生・平・長尾・上作延の 4 村が「向丘村」（むかおかむら）となりました。

昭和 13 年に宮前村・向丘村は川崎市に編入され、村名は川崎市の大字として残っています。また、この時、古くから続いてきた橘樹郡の郡名も消えました。

昭和 41 年、田園都市線が溝の口から長津田まで通り、東名高速道路・国道 246 号線・市道尻手黒川線などの道路整備とあいまって、区内は大きく変化して行きます。

昭和 47 年の区制施行で高津区に含まれ、昭和 57 年、高津区から分離して宮前区が誕生しました。

宮　崎[MIYAZAKI]

❍場所

宮前区の中央部、北東寄りの地域です。宮崎 1～6 丁目は、田園都市線宮崎台駅をはさんで南北にひろがっています。また、宮前平の東隣り、梶ヶ谷と馬絹にはさまれた所に宮崎があります。静かな住宅地で、東急田園都市線が東西に通るほか、地域の南側を尻手黒川線道路が東西に走り、西側を国道 246 号線が南北に走っています。

❍由来

「みやざき」というのは、明治から昭和のはじめにかけて、このあたりにあった「みやさき村」の名前を引き継いだものです。

明治 22 年の市制町村制により、この近辺の五村（馬絹・土橋・有馬・野川・梶ヶ谷）が合併して、「宮前村（みやさきむら）」となりました。この村名は、新しい役場が旧馬絹村の字名（あざめい）である宮の前（みやのまえ）に置かれたことからきています。小学校も「宮前（みやさき）小学校」となりました。

昭和 13 年に宮前村は川崎市に編入となり、川崎区にも「宮前（みやまえ）小学校」があったため、「宮崎小学校」と改めました。

エピソード

戦時中（昭和 10 年代）には、このあたりの土地は、陸軍の東部 62 部隊に接収され、広大な軍用地が広がっていました。

宮崎台駅前通り

昭和 26 年に軍用地は、もとの持ち主に戻され、そのとき向丘村(むかおかむら)の地には「向ヶ丘」(むかいがおか)、宮前村の地には「宮崎」の町名がつけられました。

何のお宮のまえ？

宮前平［MIYAMAEDAIRA］

❍場所

宮前区の中央部に位置し、東は宮崎に、西は土橋に隣接します。戦後、軍用地の跡に「宮崎」と名づけられた一部が、昭和47年の区画整理により、宮前平1～3丁目となっています。東急田園都市線宮前平駅があり、区の総合庁舎や学校などが集まっています。

❍由来

昭和41年に宮前平駅が開設されました。町名がつけられたのは、その後の昭和47年で、駅名が元になっています。「宮前村（みやさきむら）」は、明治22年に馬絹・土橋・有馬・野川・梶ヶ谷の５村が合併して誕生し、村名として宮前が採用されました。村役場は、馬絹神社のそばに置かれ、その所の字名（あざめい）が「宮の前」であったため村名にしたということです。

駅名は、この文字をそのまま使い、読みも「ミヤマエ」とし、駅の北側が台地の平坦な所であり、しかも字名（あざめい））が大平（おおだいら）という地域だったことにより、「平」をつけ、宮前平としたのでしょう。

昭和57年に宮前区が生まれますが、この区名も宮前村の名を引き継いだものです。

エピソード

宮前平駅の北にある八幡神社の前を東西に通るる道は、旧大山街道の一部にあたります。八幡神社の石段の真ん中が、馬絹村と土橋村の境だったそうで、昔はここに馬絹分と土橋分の二つの社が並んでいたそうです。

その後、馬絹分の社を小台の人々が受け継いで、小台の鎮守としてまつり続けているのが現在のお宮です。

宮前平駅北の八幡神社参道の石段

野　川(NOGAWA)

❍場所

宮前区で一番南に位置しており、西隣りは東有馬、北は馬絹と梶ヶ谷です。南側は横浜市港北区に接しています。地域の中央を矢上川(やがみがわ)が東西に流れ、その南北が台地になっています。

❍由来

野川の由来は定かではありません。

地域の中央を流れる矢上川を、土地の人は「野川」と呼んでいたようです。文字どおり「野の中を流れる川」ということで、これが地名になったのでしょう。

エピソード

野川は、歴史の古い土地です。地域の北部にある影向寺（ようごうじ）は、奈良時代の創建と伝えられる川崎最古の寺です。平安中期の薬師如来（やくしにょらい）の大像をまつっています。

この寺のある台地の西側に「領家谷(りょうけやと)」という地名が残っています。領家というのは中世の荘園時代の貴族のことで、荘園の名義上の持ち主です。領家方の土地として地名になったものと思われます。

影向寺の木造薬師如来両脇侍像

矢上川の南側の台地にも、権六谷戸・ほら貝谷戸・十三坊台など古い地名が数多く残っています。

鷺　沼(SAGINUMA)

❍ 場所

宮前区の南西の地域です。東は有馬と小台、北東は土橋、北西は犬蔵、南西は横浜市青葉区の新石川に接します。

昔は有馬村に属していた所で字鷺沼耕地(あざさぎぬまこうち)といっていました。東急田園都市線鷺沼駅の南側の鷺沼１・２丁目、北側の３・４丁目の地域です。

❍ 由来

沼や池があったわけではなく、地元の人の話しでは大きな湿地が広がっていたそうです。今の日本精工のグランドのある広い窪地を中心に、長谷戸(ながやと)・むじな谷戸などの脇谷戸(わきやと)を含んだ地域です。

色々な水鳥が飛来し、その水鳥を鷺に代表させて「鷺沼」と呼んだとのことです。

日本精工のグランド

エピソード

この鷺沼の湿地から流れ出る水は鉄分が多く、赤茶色だったため人々は、この水で糸の染色に利用したそうです。また、下流には「金くそ谷戸」の地名があります。水の中の鉄分を「かなくそ」と呼びましたが、本来は製鉄の際にでる鉄滓(てっさい)のことです。

このあたりは、戦時中軍用地として接収され、戦後、昭和25年の接収の解除により、川崎市宮崎字（あざ）新鷺沼という町名になりました。昭和41年に東急田園都市線が開通し、鷺沼駅が開設されました。地域の景観は大きく変わり、都市化が進み、住宅やマンションの立ち並ぶ街に変わりました。

神　木(SIBOKU)

❍ 場所

宮前区の一番北の地域で、隣は多摩区長尾に、東は高津区上作延に接しています。平瀬川が中央を西から東へ流れ、東名高速道路が南北に通っています。

江戸時代には、長尾村に属し、その南半分が区域となっていました。谷（やと）長尾とか、もしくは神木（しぼく）長尾と呼ばれたところです。

❍ 由来

地名の由来は定かではありません。

地名の由来についてはいくつかの説があります。一つは、渋子（しぶこ）という郷名（ごうめい）からきたものとする説です。

室町時代に馬絹・平・神木のあたりは「太田渋子郷」(おおたしぶこごう)と呼ばれていました。太田は馬絹をさし、渋子が神木にあたると考えられ、「シブコ」が「シボク」に転化し、後世に神木と表記されたものだろうということです。

もう一つは、新牧(しんぼく)からきたとする説です。

当地の南東に古代の勅旨牧(朝廷の用馬の生産牧場)である「石川の牧」がありました。鎌倉時代に入ってその牧が広げられ「新牧（しんぼく）」と呼ばれ、それが「シボク」となったということです。漢字は後世の当て字でしょう。

エピソード

神木１丁目に等覚院という古寺があります。この寺に伝えられる話が、神木の地名の由来になっています。

大和朝廷時代、ヤマトタケルノミコトが、東征(とうせい)の帰りにこの地を通り、鶴のみちびきで喉の渇きをいやすことができたことにより、記念に木を植えました。

等覚院の山門内

後年、これが大木となり、平安時代初期に円珍という偉いお坊さんが、神木といわれたその木で不動明王の像を刻み、神木で彫られた不動様ということで神木不動と呼ばれました。

神木不動のある地、これが「神木」の地名となったということです。

等覚院は「つつじ寺」として有名です。5月初旬には、山門に至る道が花で一杯になり見事なものです。

丘陵地なのに平なの？

平　【TAIRA】

❍場所

宮前区の中央北寄りにあり、東名高速道路の東京料金所あたりから北西に広がる地域です。北西は多摩区東生田、北東は五所塚や神木本町に、南は初山から菅生に隣接しています。

北部と南東部は、やや高い丘陵地で、中央部はややなだらかな台地がひろがり、その間を平瀬川が東へ流れています。

❍由来

この地域は、丘陵部に位置していますが、全体的になだらかな傾斜地となっています。「タイラ」という言葉は、本来傾斜地をふくんだなだらかな地形をいいます。このような地形の特徴から地名がつけられたのでしょう。すでに戦国時代(16 世紀なかば)には使われていた地名です。

また、戦国時代の領主であった葛山　平（くずやまたいら）の名が、地名になったと言われてきましたが、人名が地名になることはあまりなく、疑問が残ります。

エピソード

平地域は、白幡八幡大神を鎮守としています。言い伝えでは鎌倉時代初め、源頼朝(みなもとのよりとも）の祈願により創建されたとのことで、稲毛領の総鎮守でもあります。

民俗芸能「禰宜舞」を伝える白幡八幡大神

八幡宮は、源氏の氏神(うじがみ)です。白幡は源氏のシンボルの白いのぼり旗をいいます。

毎年７月と９月の第３日曜日には「禰宜神楽」（ねぎかぐら）が奉納されます。

禰宜というのは神社につかえる神官(しんかん)のことで、その人たちにより神楽が舞われます。非常に珍しく、市の文化財の指定をうけています。

菅　生（SUGAO）

❍ 場所

宮前区の南西部に位置し、北は初山と多摩区長沢、南は犬蔵、西は水沢・菅生ヶ丘で、蔵敷(ぞうしき)交差点を中心とした広い地域です。

江戸時代には、下菅生村と呼ばれていた所です。明治に菅生村となり、昭和 13 年からは川崎市菅生になりました。

菅生村自体は、初山・犬蔵を含んだ広い地域でしたが、住居表示以後の町区域である菅生 1～6 丁目は、それよりずっと小さい地域を指しています。

❍ 由来

菅生は、鎌倉時代にはすでに使われていた古い地名だと考えられます。

菅生とは「菅の生（お）うる地」すなわち菅が多く生えている所ということでしょう。菅は、湿地にはえる萱（かや）や荻（おぎ）を含んで、繊維質が強く、昔から蓑（みの）や笠（かさ）や菅畳（すがだたみ）の材料となり、人の生活に役立ってきた植物です。そういう生活に役立ったものが多くある所では、そのものの名が地名になりやすいのです。

エピソード

菅生は、菅生神社を鎮守としています。もとは若宮八幡社といいました。平の山八幡大神と関係あるかもしれません。明治 43 年に村内のいくつかのお宮を合祀（ごうし）して、菅生神社と名のりました。

菅生神社

菅生の中で変った地名の一つに「堂見物」(どうけんぶつ)があります。蔵敷交差点から長安寺の前に至るあたりの呼び名です。

昔、長安寺が再建(さいこん)された時、その伽藍(がらん＝お寺の建物)の見事さが評判となり、村人がそのお堂を見物に大勢集まったそうです。これがなまって、「どうけんぶち」と土地の人は呼んでいるとのことです。

初　山[HATUYAMA]

❍場所

宮前区の最北部の地域です。北は生田緑地に接し、川崎国際カントリークラブゴルフ場を含み、東は平と白幡台に隣接します。江戸時代には下菅生村に属していました。

昭和61年の住居表示で初山1・2丁目となりました。

❍由来

由来は定かではありません。

昔、正月に山仕事の初日に、山ノ神をまつる神事を行いましたが、その神事を「初山」神事といいました。

初山獅子舞

山裾（すそ）にあたるこの地に、「初山」神事を行う山ノ神の祠(ほこら)があったのかもしれません。

エピソード

初山1丁目のゴルフ場のあたりに、今は使われていない古い地名が数多く残っていました。生田緑地との境に「鍛冶屋敷」という地名がありました。昔、「枡形山城」につかえる鍛冶屋が住んでいたのでしょうか。

また、このあたりの小沢の水源が池となり、小滝となって流れ出ることから「滝沢の池」と名づけられた池があります。初夏には蛍の名所でした。ここから流れでる水が「飛森谷戸」（とんもりやと)を流れて本遠寺に至ります。この流れから枝分かれした小沢の名に「狼沢」というのがあり、昔は相当淋しい所だったと思われます。

犬　蔵(INUKURA)

❍場所

東名高速道路の川崎インターチェンジの西に広がる地域で、西は水沢、南は横浜市青葉区美しが丘です。

犬蔵は、昔の下菅生村の小名（こな＝江戸時代の字）で、現在の町名では犬蔵 1～3 丁目にあたります。

❍由来

地名の由来は定かではありませんが、二つの説が考えられます。

一つは「狼がいるような谷間」とする説です。

犬は山犬を指し、山犬とは狼のことでした。蔵(クラ)は、谷間をいう地名語です。犬蔵交差点から南西へ深くはいりこんだ枝谷戸の一番奥を、土地の人たちは「狼谷戸」と呼んでいました。昔はこの辺にも狼が棲んでいて、それが地名になったのではないかということです。

もう一つは「お犬さまのいる谷間」とする説です。

犬蔵地区の鎮守さまは、御岳神社（みたけじんじゃ）です。現在は、菅生神社に合祀されています。

この御岳神社のお使い神は「お犬さま」で「大口真神（おおぐちのまがみ）」と呼ばれます。神社の入り口に立っていたお犬様が目立つので「お犬さまの立つ谷間」の意味で「イヌクラ」と呼んだのだろうといわれています。

エピソード

犬蔵 1・2 丁目の境は、清水谷戸(しみずやと)という谷間でした。豊かな湧き水が湧き出ていたのでしょう。現在は丸子・黒川線道路になっています。

犬蔵の交差点

犬蔵 2・3 丁目の境に、昭和 15 年に廃寺となった宝蔵寺がありました。この寺の隣りには、御岳神社がありました。この神社には、室町時代の古い鰐口（つばぐち＝社前に掛けて打ち鳴らす平たい鐘）があり、応永 5 年（1398 年）の銘をもつ貴重なものです。(横浜市都筑区勝田町杉山神社に保存されています。)

御岳神社は現在はありません。